

【旧約聖書日課】列王記上 22章6～17節

⁶イスラエルの王は、約四百人の預言者を召集し、「わたしはラモト・ギレアドに行つて戦いを挑むべきか、それとも控えるべきか」と問うた。彼らは、「攻め上ってください。主は、王の手にこれをお渡しになります」と答えた。⁷しかし、ヨシャファトが、「ここには、このほかに我々が尋ねることのできる主の預言者はいないのですか」と問うと、⁸イスラエルの王はヨシャファトに答えた。「もう一人、主の御旨を尋ねることのできる者がいます。しかし、彼はわたしに幸運を預言することがなく、災いばかり預言するので、わたしは彼を憎んでいます。イムラの子ミカヤという者です。」ヨシャファトは、「王よ、そのように言うてはなりません」といさめた。⁹そこでイスラエルの王は一人の宦官を呼び、「イムラの子ミカヤを急いで連れて来るように」と言った。

¹⁰イスラエルの王はユダの王ヨシャファトと共に、サマリアの城門の入り口にある麦打ち場で、それぞれ正装して王座に着いていた。預言者たちは皆、その前に出て預言していた。¹¹ケナアナの子ツィドキヤが数本の鉄の角を作って、「主はこう言われる。これをもってアラムを突き、殲滅せよ」と言うど、¹²他の預言者たちも皆同様に預言して、「ラモト・ギレアドに攻め上って勝利を得てください。主は敵を王の手にお渡しになります」と言った。

¹³ミカヤを呼びに行った使いの者は、ミカヤにこう言い含めた。「いいですか。預言者たちは口をそろえて、王に幸運を告げています。どうかあなたも、彼らと同じように語り、幸運を告げてください。」¹⁴ミカヤは、「主は生きておられる。主がわたしに言われる事をわたしは告げる」と言って、¹⁵王のもとに來た。王が、「ミカヤよ、我々はラモト・ギレアドに行つて戦いを挑むべきか、それとも控えるべきか、どちらだ」と問うと、彼は、「攻め上って勝利を得てください。主は敵を王の手にお渡しになります」と答えた。¹⁶そこで王が彼に、「何度誓わせたなら、お前は主の名によって真実だけをわたしに告げるようになるのか」と言うど、¹⁷彼は答えた。「イスラエル人が皆、羊飼いのいない羊のように山々に散っているのをわたしは見ました。主は、『彼らには主人がいない。彼らをそれぞれ自分の家に無事に帰らせよ』と言われました。」

【使徒書日課】ペトロの手紙二 1章19節～2章3節

1 ¹⁹こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意しててください。²⁰何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないということです。²¹なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖靈に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。

2 ¹かつて、民の中に偽預言者がいました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れるにちがひありません。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを贖ってくださった主を拒否しました。自分の身に速やかな滅びを招いており、²しかも、多くの人が彼らのみだらな楽しみを見做っています。彼らのために真理の道はそしられるのです。³彼らは欲が深く、うそ偽りであなたがたを食物にします。このような者たちに対する裁きは、昔から怠りなくなされていて、彼らの滅びも滞ることはありません。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 5章36～47節

³⁶しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証している。³⁷また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。³⁸また、あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。³⁹あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。⁴⁰それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしな

⁴¹わたしは、人からの誉れは受けない。⁴²しかし、あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている。⁴³わたしは父の名によって来たのに、あなたたちはわたしを受け入れない。もし、ほかの人が自分の名によって来れば、あなたたちは受け入れる。⁴⁴互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしなあなたたちには、どうして信じることができようか。⁴⁵わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ。⁴⁶あなたたちは、モーセを信じたのであれば、わたしをも信じたはずだ。モーセは、わたしについて書いてあるからである。⁴⁷しかし、モーセの書いたことを信じないのであれば、どうしてわたしが語ることを信じることができようか。」

夜明けを待つ【こども説教のために】

アドヴェント・キャンドルに第二の光が灯りました。第四のロウソクが灯るまで、わたしたちは、ゆっくりと御子のご降誕、クリスマスを待ち望みながら過ごします。

ロウソクの光が増していくこのとき、夜は一年で最も長くなります。日暮れは早く、夜明けは遅いのです。アドヴェントのロウソクは、ともし火が増すほどに、闇夜の深まりをわたしたちに知らせるのです。

スイッチ一つで電気の照明をつけられるわたしたちは、一晩中でも明かりを灯していられます。家の中に籠っていれば、外に闇夜が広がっていることに気づかないかもしれません。けれども、ひとたび停電になれば、わたしたちは、夜の暗闇に覆われてしまうでしょう。小さな明かりだけを頼りに、夜が明け、朝日が昇るのを待つしかありません。それでも、わたしたちは、いつか必ず朝の光を見ることができると信じて、待つでしょう。

アドヴェントを過ごした後に御子のご降誕を祝うクリスマスを、「聖なる夜」と呼ぶ人たちがいます。ロウソクのともし火は、わたしたちを、暗闇へと導いてくれます。「聖なる夜」を迎えるためです。そのときまで、夜の暗闇は深まります。そこで、わたしたちは、夜明けを待つことになるでしょう。

明けの明星が昇るとき

今年はちょうど今の季節、夜明け前の東の空に、明けの明星が輝いて見えています。ようやく薄明が始まる時刻に、ひと際明るく輝く星を、使徒ペトロも見上げることがあったのでしょうか。

「夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで」と、使徒は言います。明けの明星は、夜明けが近いことを知らせるしるしです。明けの明星が昇り始め、その輝きを見るならば、もはや夜明けは近いのです。今、わたしたちの教会にも、まさに、明けの明星が心の中に昇り始めていらっしゃる方がいます。

初期の教会には、主の日の礼拝を共にするために、前夜夕刻から集まり、深夜、明け方にかけて東の空を見上げながら行った人々がいたようです。日の出が訪れれば日常生活に戻らなければならないという事情もあったようですが、朝の日の出をキリストの到来のしるしとして見るようになったことにもよるようです。その来光の前、夜明けを告げる明けの明星を見上げながら、祈りを共にすることもあったのに違いありません。明けの明星は、幼子としてお生まれになられた御子キリストを指し示すしるしとなったのです。

もっとも、明けの明星は、必ず昇って来るとは限りません。数カ月ごとに、宵の明星と入れ替わります。夕刻、日没後の薄明の頃、西の空に輝いて、そのまま沈む星です。宵の明星の季節には、いくら早起きして東の空を見上げても、明けの明星を見つけることはできないのです。

「明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として…この預言の言葉に留意してください」と、使徒は勧めます。御子キリストという明けの明星が心の中に昇ることを期待して、教会へと足を運んでくださる方がいらっしゃいます。けれども、その輝きを見いだせずに落胆し、足が遠のいてしまう方も少なくないのです。もしも、それが、牧師をはじめとする教会に原因があつてのことであれば、申し訳ないことです。それでも、敢えて申し上げるならば、牧師や教会に躓くことがあつても、なおとどまっていたいただきたいのです。聖書の御言葉を聞き続ける教会の営みの中に、留まり続けていただきたいのです。そうすれば、季節は必ず巡るでしょう。宵の明星の季節は終わり、明けの明星の季節が訪れるのです。そのときに、明けの明星が心の中に昇ることを見逃さないためにも、聖書の御言葉が聞かれるところに留まっていたいただきたいと、使徒は教えたのです。使徒と共に、教会もそう教えてきました。

明けの明星として御子キリストが心の中に昇るときが、必ず訪れます。夜明けは近いのです。そのとき、御子の光に照らされたご自身の姿を、わたしたちと共に見る者となっていたいただきたいのです。

暗い所に輝くともし火

昨年来の戦争の報は、今年も、収まるどころか激しさを増し、広がりを見せるばかりでした。昨年は、報道を通して遠い国の戦争を目の当たりにしながら、「とてもクリスマスを祝える心ではない」と訴える方がありました。聖書の地の戦闘が止まらない今年も、なおさら、そのような思いにとらわれている方がいるのかもしれませんが。けれども、そのような時代だからこそ、わたしたちは、待降節を守り、備えて降誕祭を迎えたいのです。

今日 12 月 10 日は、1942 年にドイツの詩人ヨヘン・クレッパが妻子と共に自ら命を絶った日です。彼は、ユダヤ人の妻が強制収容所に連行されることを避けられないと判断したとき、苦渋の決断として死を選んだのです。

彼は、宗教詩をいくつも残していますが、その多くは、ユダヤ人女性と結婚したがゆえに著作の出版に制限がかけられる中で記されたものです。その中には、待降節や降誕祭のための美しい詩も含まれていました。戦後、彼の名譽を回復し、詩作を再評価したドイツの教会は、いくつかの宗教詩を讃美歌として歌うようになりました（243 番「闇は深まり」など）。

それらの詩を読むとき、彼が、なぜ絶望して死を選ばなければならなかったのか、不思議に思えます。美しくも、希望に満ちた言葉が、並べられているからです。それは、暗闇が深いからこそ、小さなともし火を見つめる言葉だったのかもしれませんが。

「聖書」を、わたしたちは、「神の言葉」として読み、聞きます。けれども、そこには、人間の現実の闇が満ちています。旧約聖書日課（列王記上 22 章）は、王国時代のユダ・イスラエルの王たちの物語の一節が描かれていました。彼らも、戦争や政争に明け暮れていました。ここに描かれたイスラエルの王（アハブ王）は、この後、預言者たちの後押しで始めた戦争で、戦死してしまいます。主イエスの物語や教えが記された「新約」はともかく、古い時代のイスラエルの現実が描かれる「旧約」は、とても「神の言葉」とは思えないと、信者であっても多くの方が感じるころでしょう。

けれども、その「旧約聖書」を、主イエスは「神の言葉」として読まれたのです。使徒たちは、「暗い所に輝くともし火」としたのです。わたしは、「聖書」は、「暗闇の書」だと思ふことがあります。人間の現実をあぶりだす「暗闇の書」です。けれども、その「暗闇」の中に、「輝くともし火」を見ることがあるのです。見ることができるのです。「神の光」に気づかされるのです。

「暗闇の現実」を、わたしたちは直視すべきです。その現実の中にこそ、「輝くともし火」が灯されているからです。そのともし火を灯し続けるならば、わたしたちは、必ず、「明けの明星」が昇るのを見るようになるでしょう。夜明けを待つ者に、朝は訪れます。眠ることなく歩む朝を、迎えるのです。